

検証

崩拓銀

<8> 10.10.26

しいカプトデコムとその周辺企業に対する、事実上の「回融資」の受け皿として使われた。

拓銀は九二年秋、対外的にはカプト支援を装いつつ、裏では自らへの被害を最小限に抑えながらカプト切り捨てを図るといふ「二枚舌対応」を秘密裏に決めていた。この回融資は、一見、カプト支援のようだが、背後に拓銀の保身の姿勢がのぞいていた。

拓銀の本支店から上がり決めた融資案件は「諸貸出か」。当時、本店営業部にい「申請書」というA4判の書類となり、本店営業部でコンピュータ入力される。そこに集まる書類の中に「アワジ商会」「ミッテル」「もりに商事」「ローレイ」など見慣れぬ融資先企業が目立ち始めたのは、一九九二年暮れのことだ。

ダミー

つ、わき起る疑問を禁じ得なかつた。

融資額は一挙に一社で十億、百億円単位。通常「物件取得資金」などと記入されるべき使途欄には「経営会議決定事項」とあった。そのほか必要な添付書類もない。「こ

れも、拓銀から経営悪化の著

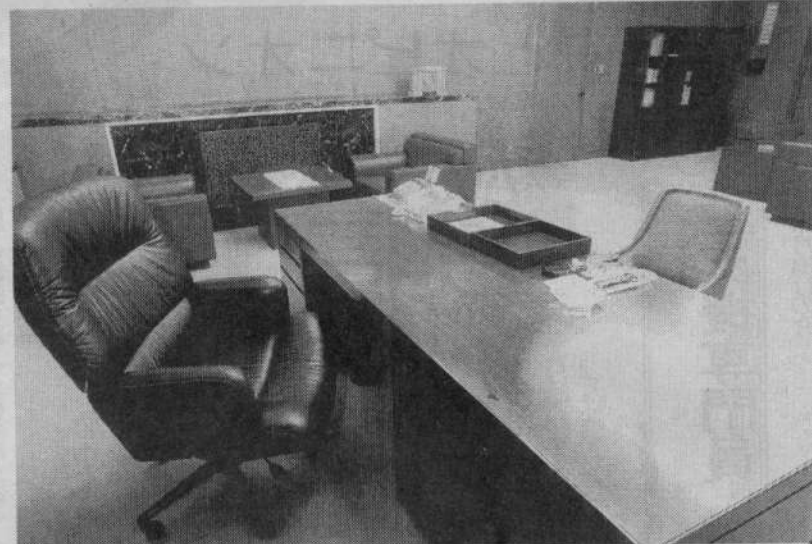
この数日間、表に四百億円近い融資が拓銀からダミー会

飛ばしで保身図る

社の一つ、ミッテルに対してのうちの「カプト」とそのグルー

商事、ローレイなどは不動産

札幌の円山公園近くのマンション。見るからに高級感漂う建物の玄関に「アワジ商会



イス

ここに座ることができるのは、ただ一人。決断と責任。トップはその時、何をどう考えたのか。本店頭取室

これら十社に対するたぐい

んファイナンスなどからの貸

付金は当時、不良債権化して

おり、一連のカネの流れの背

景には「年度末にたくさんフ

ファイナンスなどの不良債権を

ダミー会社に移し替える、い

わる。不良債権飛ばし」の

意図があった」（関係者）と

される。

また、アワジ商会、もりに

た。監督する立場の金融

当局も一連の危険な動きを容

認していた節がある。当時の

拓銀首脳は北海道新聞の取材

買いたさった。ひそかに想定「ローレイ」もりに商事としていたカプト倒産に向けて、自行の不良債権を表面上「覆い隠す狙いが、拓銀にはあ

この時期、同様な拓銀のダ

ミー会社は三十社前後もあ

たとされ、カプト関連以外の

不良債権隠しにも使われた。

急増する不良債権におびえる

拓銀の必死の「あがき」だ

三社の共通の社長を務める

拓銀OBの人物に会った。「三

社とも貸貸収入はあるし、銀

行への利払いもしている。決

して「ローレイ」ではない

と憤慨した口調で取材に答

えられた。

だが、その「いつか」は結

局、こなかつた。

敬称略、肩書は当時

（拓銀問題取材班）